中３　漢字テスト

P103～106

氏名　【　　】

★以下の傍線部を漢字に直しなさい。
必要な場合は送り仮名もつけなさい。

①あわれな姿をさらす。
②自動車のハンドルをにぎる。
③なまりの毒が体内にまわる。
④ジンソクに行動する。
⑤あせに乗り上げる。
⑥悪いところをゼセイする。
⑦娘のむこを紹介する。
⑧おしくも敗れ去った。
⑨ソガイカンを味わう。
⑩古代のブンケンを調査する。
⑪親の言葉をケン虚に聞く。
⑫ギセイテキ精神の持ち主。
⑬カンガイにひたっている。
⑭ゲンカンのドアを開ける。
⑮趣味でイゴを楽しむ。
⑯のどが痛む。
⑰手紙に写真をそえる。
⑱ツイトウの文集を出す。
⑲美しいにじがかかる。
⑳器用にはしをあつかう。
㉑ジバンが弱い。
㉒まゆをひそめる。
㉓事実をカクジュウする。
㉔上品なシュクジョ。
㉕旅のジョウチョを味わう。

採点者名【　　】

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「文化を受け継ぎ発展させること」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

5 次のAは、和歌に関する対談の一部である。Bは、対談中で話題にしている藤原俊成が書いた「六百番歌合」の解説文であり、□内の文章は引用された「六百番歌合」の原文である。また、……内の文章は原文の現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

河合　『松浦宮』は定家のお遊びですかね、おれはこんなこともできるぞ、という。

池田　歌をやるためには、歌よみはまず、『古今集』をなによりの規範として勉強するわけです。それから定家の父親の俊成は、歌よみは『源氏物語』を読めとさかんに言っている。『源氏物語』はもちろん物語ですが、歌が約八百首もある。どういうときにどういう歌を詠めば評価されるか、またいかなる行事のときにどのような型にはまった歌を詠むべきかとかということは、歌の集を読んでいたのではわからないアわけです。歌を詠む前後の人びとの心の動きとか状況を勉強するには『源氏物語』は格好の教材なんです。

河合　なるほど。

池田　俊成は『源氏物語』を読まないイ歌よみは遺恨だという。――遺恨といっても恨みを残すという意味ではなくて遺憾という意味ですね。だから定家は若いころから当然『源氏』や『古今集』を読んでいた。しかし『古今集』の前に当然『万葉集』があるわけですから、『万葉集』をよく読み解かないウと、古い時代の歌ごころはわからない。俊成も『古来風体抄』のなかで『万葉集』の歌から講義を始めています。＊萩谷朴さんがさかんにいわれていることですが、『松浦宮物語』を書くことによって定家は万葉風の古い時代の物語をイメージしたのではないか、そうすると当然、万葉調の歌を詠まざるをえないわけで、万葉調に詠んでいったらこういう歌になりますよと、そういうテクニックを『松浦宮』を書くことで習熟しようとしたのではないかと、つまり万葉稽古だと萩谷さんはおっしゃる。これはとてもおもしろい見方だとは思います。

河合　歌の場合は独立して歌としてある場合と、日常会話というか、その場面に応じて詠まれる歌がありますから、『源氏』を読むとどういう場面でどういう歌を詠むべきかということがよくわかるわけですね。

池田　しかも非常に細かくわかるんです。詠む人の立場、身分、それに歌を詠むシチュエーションなどが『源氏』ほどはっきりわかる参考書はエない。歌が八百首近くあるわけで、八百首の歌集というのは金

葉集や詞花集より多くて、かなりのものなんですね。

河合　それはそうですね。

池田　ですから『源氏』を長い説明のついた歌の集として読めば、歌よみの教材として抜群です。

河合　紫式部はもちろんそれを意識して歌をつくっているわけですね。だから笑われるような歌もわざと詠んでいる。そしてほんとうの歌として通用する歌もつくっているわけですね。

池田　そういうことです。

河合(1)　『古今集』を編集するときはどうしたんでしょうか、ともかくいい歌を選んだのでしょうか。

池田　『古今集』にしても勅撰集の場合には、まず撰者が選ばれて、撰者が歌を持ち寄って、いい歌、悪い歌をふるい分けていく。それから部立といって、どういうジャンルの歌をどれくらい載せるか、構成なんかも考えていくのですが、定家の時代の勅撰集はなかなか一回で成立しなくて、『新古今』などは切り継ぎ、つまり再編集の連続だといわれるくらいです。とくに後鳥羽院という人はご自身が歌よみとしてすぐれているし、口うるさいし、武芸もできるし、すべてできすぎるくらいの人だったんですね。ですから撰者を任命してもいろいろ気にいらないので、あれを入れろ、これは入れるなと何回もやりかえたようです。だから隠岐へ流されても隠岐でもやっていたようなのです。

勅撰集といえば、なにしろ天皇や上皇の名において編纂するわけですから、そこに自分の歌が一首でも入るとそれは極めて名誉なことで、何首も入ったり、いわんや撰者に任命されるというのはたいへんな名誉です。定家は『新古今』の撰者の一人ですが、『新古今』の次の『新勅撰集』の場合は撰者は定家ひとりですから、これはたいへんなことです。

河合　『松浦宮』に出てくる歌で、やはり定家らしいという歌もありますか。

池田　定家らしい歌はあまりありませんが、後半にすこしあります。前半の歌はかなり万葉風につくろうとしていますからね。(2)むしろ意識的に定家らしくなくつくっているように見えますね。

河合　それはまたおもしろいですね。だから物語を書くことによって自分も楽しんだのでしょうね。

（河合隼雄、池田利夫「松浦宮物語と藤原定家」による）

B　さて、俊成は『源氏物語』について、きわめて印象的な言葉を残していた。それは『六百番歌合』にある以下の言葉である。

冬上十三番　枯野　左勝　女房（藤原良経）

見し秋を何に残さん草の原ひとつに変る野辺のけしきに

右　隆信

霜枯の野辺のあはれを見ぬ人や秋の色には心とめけむ

右方申云、「草の原」聞きよからず。左方申云、右ノ歌古めかし。判云、左、「何に残さん草の原」といへる、艶にこそ侍めれ。右ノ方人、「草の原」難申之条、尤うたたある事にや。紫式部、歌詠みの程よりも物書く筆は殊勝也。其ノ上、花の宴の巻は、殊に艶なる物也。源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也。右、心詞、悪しくは見えざるにや。但、常の体なるべし。左ノ歌、宜。勝と申べし。

「判云」以下が俊成の言葉（判詞）である。この二つの歌は、「枯野」という題で詠まれている。どちらがよいかを判定するのが判者たる俊成の仕事となる。結論は、女房（歌合では高貴な主催者の場合身分を隠して「女房」と記されることが多い）とされる藤原良経の「見し秋を」歌の勝ちとなった。通常、院・天皇をはじめとする高貴な人（この場合は「女房」と記される良経）は歌合では勝つことになっているから、この結果にそれほどの驚きはないが、問題は勝った理由である。俊成は判詞で藤原良経詠の「草の原」にひどく反応しているのだ。

まず、「左の歌（藤原良経詠）は、「何に残さん草の原」と言っている、これは艶（優美）でございます」と讃めている。そして、判詞の前に「草の原聞きよからず」（「草の原」は聞きにくい、あまり聞いたことがない）とした「右方」の難陳（双方の方人がそれぞれ相手の歌を批判したり評価したりすること）に対して、「「右方」の人が「草の原」を非難するのは間違っている。紫式部は歌人以上に物語を書く能力が優れている。加えて、『源氏物語』「花宴」の巻はとくに優美なものである。ああ、『源氏物語』を読まない歌人は遺恨（遺憾・残念、もっと言えば駄目だくらいの意味）のことだ」と嘆くのである。[3]

はじめてこれを読んだ人は、どうしてここで唐突に『源氏物語』が出てきたのか、不思議に思ったに違いない。種明かしをすれば、『源氏物語』「花宴」巻にこのような歌があるのだ。

女

*朧月夜

*うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ

（前田雅之「なぜ古典を勉強するのか」による）

冬上十三番　枯野　左の勝ち　女房（藤原良経）（の歌）

秋の間に見た美しい景色を何に残したらよいだろうか。秋の間多くの花が咲いた草の原も枯れて見渡す限り同じ景色に変わってしまっている。

右　隆信（の歌）

霜枯れの野辺の荒れ果てた様子に目を留めない人が秋の寂しい景色には心をとめたのであろうか。

右の歌の作者（隆信）は、（良経の歌の）「草の原」は歌に使う言葉として聞きなれない（のでよくない）と申します。左の歌の作者（良経）は右の歌は古めかしい（のでよくない）と申します。

判定役（俊成）としていうと、左の歌の「何に残さん草の原」というのが優艶でございます。右の歌の作者が「草の原」を非難したのは非常に不満です。紫式部は歌を詠むより物語を書く力が格段に優れています。その上、（源氏物語の）花の宴の巻は、特に優美な話です。源氏物語を見ていない歌詠みはとても残念です。右の歌の内容と言葉は悪くありません。とはいうものの、ありふれた平凡な歌です。左の歌の方が素晴らしく、勝ちというべきです。

〔注〕

松浦宮――平安時代末期から鎌倉時代の歌人である藤原定家による物語『松浦宮物語』のこと。

萩谷朴――国文学者。

藤原良経――平安時代中期の歌人。

朧月夜――『源氏物語』の登場人物。女性。

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ

――つらい身の私が、このまま消えてしまったら、名を知らないからといって、あなたは草の原を分けてでも私を尋ねようとはなさらないでしょうか。

〔問1〕 Aの中の ―――― を付けたア～エの「ない」のうち、他と意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問2〕 (1)河合さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 池田さんの『源氏』における歌の説明に疑問をもち『古今集』での歌の選び方を尋ねることで、話題を整理している。

イ 『源氏』の歌の作り方について池田さんと共通理解を得られたことで、対談の内容を深めるために話題を『古今集』に転換している。

ウ 歌を詠む上での『源氏』と『古今集』の重要性について池田さんと共通理解を得たことで、自説を述べるきっかけを作っている。

エ 池田さんの『源氏』の説明に疑問をもち『古今集』との共通点について質問することで、次の発言を促している。

〔問3〕 (2)むしろ意識的に定家らしくなくつくっているように見えますね。とあるが、ここでいう「意識的に定家らしくなくつくっている」を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 定家は『万葉集』の時代を想像して書いた『松浦宮』の作中において、自身の作風とは異なる万葉風の歌も詠んだということ。

イ 定家は『万葉集』を批判するために書いた『松浦宮』の作中において、万葉風とは違う作風の歌を詠んだということ。

ウ 定家は『万葉集』のよさに改めて気付き、『松浦宮』の作中で徐々に万葉風の歌を増やしていったということ。

エ 定家は『万葉集』の歌ごころが想像できるようになったからこそ、『松浦宮』の作中で万葉風とは異なる歌のみを詠んだということ。

〔問4〕 (3)非難するのはとあるが、Bの原文において「非難するのは」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 聞きよからず

イ 艶にこそ

ウ 難申之条

エ 悪しくは見えざるにや

〔問5〕 A及びBでは共通して『源氏物語』を歌人の必読の物語だとする俊成の考えが示されているが、A及びBのそれぞれで述べられた、歌人にとっての『源氏物語』の価値を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア Aでは『古今集』を読み解くのに適している作品だと述べられており、Bでは歌合の判定の根拠になるほど優美な歌が含まれる作品だと述べられている。

イ Aでは歌が詠まれる状況や心の動きを理解できる作品だと述べられており、Bでは歌を含む物語によって優美な世界を表現できる人物が書いた作品だと述べられている。

ウ Aでは作中の歌を通じて『万葉集』の時代の人の心を理解できる作品だと述べられており、Bでは優美な歌合の様子が現代の私たちにもわかる作品だと述べられている。

エ Aでは歌の技法を理解するのに適している作品だと述べられており、Bでは歌集としての評価以上に優美な物語として高く評価されている作品だと述べられている。